モンゴル辺境の旅

ウェーブ産経推進本部長　　塩塚　保

あれは、寒い冬の夜だった。
平成２０年２月７日（木）午後６時３０分から、わたしたちは東京・根津の小料理屋「根津くらぶ」で一杯やっていた。
日本柔道整復師会副会長、工藤鉄男さんと東京都柔道接骨師会事業部長、亀山実さん、それにわたしの３人だ。
工藤さんは、津軽生まれの豪快な男だ。それなのに、酒は飲めない。一方、亀山さんは酒豪だ。とっくりにたっぷり入った熱い酒は、もっぱら、わたしと亀山さんが飲んでいる。
日本柔道整復師会はモンゴルで、日本の伝統的治療法を実技指導している。モンゴルは遊牧の国だ。落馬して骨折や脱臼する事故が多い。首都ウランバートルなど都市には医療施設が整っているが、地方では満足な治療を受けることができない。柔道整復師は、日本の伝統治療法である柔道の活法を駆使し、患者を治療する。高度な医療施設や器具を必要としない。モンゴルの地方でも入手できる包帯、針金、ビニール袋などを使って対応する。とても有効的だ。
「３月にモンゴルへ行きます。どうです。塩塚さん、同行しませんか」と工藤さんが誘う。
モンゴルか。心が動く。わたしは世界の国々を旅している。行ってみたい国でまだ、足を踏み入れていないのは、スペイン、ペルー、そしてモンゴルである。いい機会ではないか。
「ただし、安全は保証できませんよ」
工藤さんは、にっこり笑って恐ろしいことをいう。
モンゴルの国内航空機は世界で２番目に危険という。国連本部は、国連職員に対してモンゴルの国内航空機への搭乗自粛を通達しているそうだ。
また、地方では道路事情が悪い。ロシア製ジープで、草原や荒野をぶっ飛ばす。当然、事故も多い。
快適な宿泊施設はない。おそらくシャワーも水洗トイレもないだろう。食事は羊肉の一点張りだ。
「それでもなお、モンゴルは魅力的です。一度行ったらやみつきになりますよ」
わたしは覚悟を決めた。
「わかりました。いっしょに行きましょう」

３月２１日（金）曇り

わたしたちは、午後１時３０分、成田空港第１ターミナル南ウイングに集合した。
いよいよ、モンゴル辺境へ旅立つのだ。亀山さんたちは、きびきびと機内に持ち込む器材を点検、整理している。
午後４時２５分、わたしたちを乗せたモンゴル航空５０２便は、成田空港を飛び立った。
機内の乗客の混み具合は、６割程度だ。座席はかなり空いている。途中、旅客機は韓国・仁川空港に立ち寄った。仁川空港で、韓国人、モンゴル人が大勢、乗り込んでくる。機内はほぼ満席となった。はるかなる鎌倉時代、１２７４年、そして１２８１年の２度にわたってモンゴル軍は、高麗軍を先兵として日本侵略を企てた。２１世紀のいま、日、蒙、韓の人々が同じ飛行機に乗って旅をしている。平和である。
機内食のサービスがあった。ビールと赤ワインを頼む。食後、いい気持ちになった。座席にもたれて眠る。
機内アナウンスで、目覚めた。

「あと２０分で、ウランバートルに到着します」
　窓から大地をのぞく。漆黒の闇だ。おそらく広大な草原がよこたわっているのだろう。やがて、闇のなかに光が現れた。光の束は一気に増えていく。宝石箱をまき散らしたようだ。ここが、モンゴルの首都、ウランバートルなのだ。
　午後１１時２５分、飛行機はチンギス・ハーン国際空港に着陸した。入国管理の係官は４人いた。３人が女性で、男性は１人だ。東京で入国査証を取得していたので、順調に通過した。トランクなど荷物を受け取り、税関を抜ける。税関の係官の多くも女性だ。モンゴルの女性たちは深夜まで働く。
　空港ロビーに迎えの人々が待っていた。先乗りしたヒゲの田澤祐二さん。田澤さんは日本体育大学柔道部出身で、柔道５段の腕前だ。そして、国立健康科学大学、アマルサイハン教授（４０）。坊主頭の巨漢だ。しかし、にこにこ笑顔で愛想がいい。日本語も達者だった。若いころ、新宿の日本語学校で、学んだという。
　空港から外に出た。気温は零下５度。きりっとした寒さだ。夜空を見上げる。星は数えるほどしか見えない。ウランバートルでは、石炭暖房のため、大気が汚染されているという。

　空港前に停車したマイクロバスに荷物を積み込む。ドアからではない。窓からトランクを押し込んでいく。これがモンゴル流か。空港から市街地まで約２０㌔。車で３０分ほどの距離だ。
　月夜だった。満月が浮かんでいる。市街地の東側になだらかな山が続く。
　「この山に狼がいるよ」
　アマルサイハン教授がいった。えっ、狼がいるのか。見えるはずはないのだが、窓から外の闇に眼をこらした。
　マイクロバスが、バヤンゴルホテルに到着した。荷物も解かないうちにホテルのロビーで明日の打ち合わせをする。アマルサイハン教授が「明日午前５時に出発するよ」という。現時刻は午前１時をすぎている。最初は冗談かと思ったが、本当だった。チンギス・ハーン空港から飛行機で、西モンゴルのオラーンゴムに飛ぶという。あれ。わたしたちはホブドに行くはずだったのでは。日本柔道整復師会が作成した計画書には、目的地はホブドと明記されている。どうやら、諸般の事情で目的地が変更になったらしい。ま、いいや。モンゴルでは、モンゴルの流儀に従おう。地図を広げる。オラーンゴムは、モンゴル北西部。ロシア国境に近い辺境だ。
　ホテルは暖房が効いていた。エレベーターの内装は現代的だ。わたしの部屋は８階。広々として快適だった。シャワーからは温水が出た。シャンプーと石鹸もついている。想像以上に設備が整っている。明日の朝は早い。早々にベッドにもぐりこんだ。

３月２２日（土）晴れ

午前４時３０分、起床。ひげをそってロビーへ降りる。薄暗いロビーにコートを着た若い女性がいた。髪が長く、ほほは丸い。笑うと、ほほにえくぼが浮かぶ。細身で足が長い。身長は１７０㌢を超すだろう。ノムンダリーさん（２１）だった。彼女は国立健康科学大学医学部４年生。とても優秀な学生だ。高校時代、広島・八日市市の山陽女子高校に留学した。日本語は達者だ。旅の間、わたしたちの通訳を務めるという。

午前５時、マイクロバスでホテルを出発した。寝坊して遅れた者はひとりもいない。さすが、日本人だ。

一行は日本柔道整復師会、鑪野（たたらの）哲士、本間啄英、五反田重夫、亀山実、久米信好、根来信也先生の６人。

同行は、アマルサイハン教授、ノムンダリーさん、そして、塩塚。総勢９人である。

午前５時３０分、チンギス・ハーン空港に到着した。わたしたちは貴賓室に通された。椅子に座ってハムサンド、コーヒーの朝食をとる。

ノムンダリーさんに３月２１日付けのモンゴル語新聞「センチュリーニュース」を読んでもらった。１面の主要記事は、「カナダの会社が金山を開発する」「チンギス・ハーンを描いた女流漫画家が人気を集めている」そして「朝青龍と白鳳が大相撲で負けた」―など。モンゴルでは、朝青龍と白鳳の動向は、新聞１面に掲載されるのか。それほどの国民的関心が高いのだろう。当時、チベット暴動が世界的に注目されていたが、モンゴルの新聞には１行も掲載されていなかった。

待ち時間にノムンダリーさんと話をした。まず、名前について。

「ノムンダリーという名前は父親がつけてくれました。チベット語です。意味はわかりません」

モンゴルの知識層は、チベット語で名前をつけるというが、いまもその慣習は続いているのだろう。

ノムンダリーさんは、ウランバートルで生まれ育った都会っ子だ。地方を旅した経験がない。

地方には、水洗トイレもシャワーもないかもしれない。耐えられるだろうか。彼女はにっこり笑ってこういった。

「大丈夫です。モンゴル人ですから」

貴賓室で、アマルサイハン教授がウオツカの瓶を持ち出してきた。根来さんが持参したモンゴルの杯に注ぐ。ゴビ地方を旅したときに、地元の長老からもらったという由緒ある酒杯だ。指先を杯に浸し、空中にはじく。旅の安全を祈るモンゴル流の儀式だ。全員に杯がまわった。みんな、一気に飲み干す。朝のウオツカは強烈だ。効く。いよいよモンゴル辺境の旅が始まるか。気分が高まっていく。

モンゴルの国内便飛行機はあぶない。世界で２番目に危険という。アマルサイハン教授にそのへんの事情を聞いた。教授は平気な顔してこういった。

「飛行機事故ですか。たいしたことないですよ。２年に１回くらいかな」
また、予約していても搭乗できるか、どうか、わからない。座席数以上に予約を受け付けることが多い。故障して座れない座席もある。乗客は搭乗ゲートを抜けると、一斉に駆け出す。我先に自分の席を確保するーと、モンゴル旅行本に書いてあった。
　わたしたちが乗る飛行機は、双発のプロペラ機だった。幸いなことに、全席指定席だ。あわてて駆け出すこともなかった。機内を見渡す。故障している座席もなさそうだ。モンゴル人の乗客が、デコレーションケーキを大事そうに抱えていた。目的地のオラーンゴムにはおいしいケーキ屋がないのだろうか。

　午前７時４０分、プロペラ機は無事、離陸した。晴れ。昇ったばかりの太陽が広大な大地を照らす。草原は白い雪におおわれていた。川の流れは白く凍っている。３月下旬だが、モンゴルはまだ、酷寒の季節なのだ。窓から大地をじっとながめる。かれこれ１時間ほど飛んでいるが、道路、人家、送電線、ダムなどは、見かけない。モンゴルは日本の４倍という広大な国土を誇るが、人口は２６０万人。そのうち、９６万人が首都ウランバートルに集中している。人口密度は１㌔平方㍍当たりわずか１・６人。大地は限りなく広々としている。
　午前８時３０分、ハンバーガー、オレンジジュース、紅茶の機内サービスが配られた。
　午前９時３０分、飛行機はオラーンゴム空港に着陸した。滑走路は雪原だ。晴れ。気温は零下９度。空港ビルは日本の公民館程度の施設だ。不思議なことにトイレがない。地方空港ではトイレがないか、トイレのドアに鍵がかかっていることが多いという。
　亀山さんたちが別の地方空港で体験した実話。離陸する前、トイレを探したが、ない。しかたないので、空港ビルの外で、壁に向かって立ち小便をした。空港職員に見つかった。空港職員はカンカンに怒った。搭乗券提出を求め、「おまえたちは飛行機に乗せない」と脅された。搭乗券を破り捨てようとしたらしい。アマルサイハン教授があわてて駆けつけ、空港職員をなだめて、ことなきをえたという。
　オラーンゴム空港では、飛行機に預けた荷物を出すベルトコンベアがなかった。職員が荷物を一個ずつ手で運び出し、乗客に手渡す。わたしたち一行の荷物は無事、全員の手に渡った。
　迎えの車はロシア製のマイクロバスだった。フロントガラスはひび割れているが、頑丈そうだ。宿はまだ、決まっていない。オラーンゴムには宿泊施設が２カ所ある。いまから実際に検分して宿泊施設を決めるという。
　オラーンゴムとは、モンゴル語で「赤い砂」という意味だそうだ。モンゴル北西部、オブス県の県都だ。人口１万６０００人。空港からしばらくはゲル（移動式住居）集落が続くが、町の中心部にはレンガ造りのアパートや、コンクリート造りの行政機関や学校が建っている。

最初に検分した宿泊施設が「ウブスノール」。玄関のガラスが割れていた。室内には、消毒液の強い匂いが充満している。清掃作業で使ったのだろうか。みんなの総意は「ここは好ましくない」。

２番目に見たのが「ウタンオト」だった。３階建て。こちらの方が快適なようだ。部屋は全１０室で、４部屋が空室という。３階の１室に女性のノムンダリーさん。もう１室にたばこを吸う亀山、久米、アマルサイハンさん。２階の１室に非喫煙組の本間、五反田、根来さん。残る１室が鑪野さんと塩塚。わたしたちの部屋には、ベッド２床の寝室と応接室があった。この応接室が滞在中、打ち合わせと飲み会に使われることになる。また、私たちの部屋にだけ、水洗トイレがあった。ただし、水量が弱く、小用にしか使えなかった。

共同トイレは２階に一カ所ある。トイレの個室は３室あるのだが、２室の便器が故障していた。使用可能なのは１室だけだ。このさきが思いやられるが、水洗トイレがあるだけでもありがたい。

昼食はホテル１階の食堂でとった。丸いテーブルに９人全員が座った。若い女性従業員が料理を運んでくる。ニンジンと赤カブのサラダ。羊肉のスープ。そして羊肉を詰めたピロシキ。なかなかにおいしい。

今日は天気がいい。明日からは講習会が始まる。今日のうちに写真撮影をしたい。昼食時にわたしが提案した。みんなが賛成してくれた。

マイクロバスに乗り込み、まず、郊外の泉に向かった。中心部を抜け、ゲル集落へ。集落の向こうに小高い岩山が見える。岩山の麓で車を降りた。見渡す限りの雪原だ。夏には青々とした草原が広がるのだろう。彼方に白雪を冠した高い山々が連なる。あれが、名山といわれるハルヒラーだろうか。

３分ほど歩いた。岩山の麓に小さな泉がわいていた。

さあ、写真撮影だ。全員、柔道整復師会の青と白のジャージを着ている。大雪原を背景に撮影したい。車の前に立ち、打ち合わせをしてもらった。カメラを構え、シャッターを切った。それなりに辺境の雰囲気が出ているが、モンゴルの味が薄い。

やはり、写真にはゲルが必要だ。車で移動する。集落のはずれに、わたしのイメージにぴったりのゲルがあった。しかも、ゲルの背景には、雪を冠した岩山がそびえているではないか。ここだ。ここだ。ここで写真を撮影しよう。

「ちょっと待って」とアマルサイハン教授がいった。ゲルのそばに黒い大型犬がうづくまっている。モンゴルの犬は危険だ。狂犬病のおそれがある。教授がゲルの内部に声をかける。中年のきれいな女性が出てきた。女性が犬を鎖で繋いだ。さあ、これでだいじょうぶだ。ゲルの前に全員が立つ。背後に雪山がそびえている。カメラを構えた。わたしが望んだ通りの構図だった。これで、まず、ひと安心だ。

写真撮影の後、車で移動した。町はずれの丘に到着した。石を積み上げ、柳の木に青い布を飾っている。オボーだ。土地の守護神が宿るという。また、天につながる道ともいわれる。

教授が持参したウオツカを開封する。指を浸し、天にふりまく。グラスに注ぐ。一番に飲まされたのが、団長の鑪野さんだ。鑪野さんは、そんなに酒が強いわけではないのだが、日本男児の面目をかけて、一気にウオツカをあおった。団員にも一人ずつ酒杯がまわる。モンゴルの女医さんたちも飲んだ。そして、みんなでオボーのまわりを３周した。これもまた、モンゴル流の儀式だ。

女医さんたちが歌った。「オラーンゴム賛歌」だ。

ハルヒラーの山高く
わたしたちの心の奥にあるオラーンゴム
色とりどりの鳥たちが飛び交い
みんな楽しく暮らしている
オブスの湖
遠くから見る
鏡のようにきらきら光る

日本の五反田、根来さんがお返しとしてモンゴルの歌を歌った。

「モンゴルの草原に柔らかい世界を」。

二人は何度もモンゴルを訪問している。日本に帰ったあとも、車のなかでモンゴルの歌を聴くという。ふたりは、モンゴルの歌をそらんじている。

女医の娘、ザヤちゃん（８）も同行した。毛糸の帽子をかぶっている。大地に張った氷をそっとりあげ、空に向かって放りあげて遊んでいる。愛らしい。写真を撮影した。

小高い丘に登った。見渡す限りの雪原に一本の黒い道が伸びている。この雪原も夏には青々とした大草原に変わるのだろう。丘から下るとき、わたしはバランスを崩して転んだ。手をついた拍子に左の手のひらに怪我をした。血がにじんでいる。モンゴルの大地には炭疽菌がひそんでいるという。

感染すると危険だ。すぐにウオツカをたらして消毒した。かすかな不安がよぎるが、まあ、だいじょうぶだろう。
夕食は宿泊施設の食堂でとった。テーブルのうえにはトマトとキュウリのサラダ、春雨炒め（唐辛子味）の皿が並んでいる。そこへ、女医と保健師がバケツを抱えてやってきた。なかに入っているのは、熱々の骨付き羊肉だった。モンゴル語で「マハ」。自宅で塩ゆでにしたという。モンゴルでは客をこの「マハ」でもてなす風習がある。
さあ、食事が始まった。モンゴル最高級ウオツカ「チンギスハーン」金ラベルで乾杯だ。アルコール度数４０度。全員のグラスに注ぐ。杯を高く掲げ、「トクトイ（飲みましょう）」。一気にあおる。熱々の骨付き羊肉を手でつかみ、ナイフで肉を削り、くらう。うまい。モンゴル人になったような気分だ。

民族衣装のボヤンアラビジン君（１６）が馬頭琴を弾く。女医さんの知り合いだ。
彼は１０歳のとき、テレビで、馬頭琴の演奏を見た。
「自分も馬頭琴を弾いてみたい」
幸い、叔父さんが、馬頭琴の名手だった。７ヶ月間、叔父さんに習った。あとは独習という。
毎日２時間、練習を続けている。
「あくまで、趣味です。プロの演奏家になるつもりはありません」
夜、寝室へ。室内は蒸気暖房だが、肌寒い。ウランバートルから持参した寝袋をベッドに敷き、中にもぐりこむ。寝袋のうえに毛布をかけ、眠る。あったかい。前夜はほとんど眠ることができなかった。心地よい酔いもあって、ぐっすり、安眠できた。

３月２３日（日）雪

朝、目覚めた。さわやかな気分だ。２重窓の向こうに雪が降っている。
洗面所の蛇口をひねる。水が出ない。断水だ。ま、こんなこともあるだろう。想定内の事態である。ミネラルウォーターの水で顔を洗い、歯を磨いた。
午前８時３０分、宿泊施設の食堂で朝食。食パン、バター、チーズ、ブルーベリージャム、それに特別注文のおかゆ。モンゴルでは米作をしない。台湾から米を輸入しているという。
食後、講習会場へ向かう。車はロシア製のワゴン車だ。会場は、人民革命党オラーンゴム支部。２階の大会議室には７０人を超す受講生が集まっている。２０代の若者から７０代の熟年世代まで。地方の医者や医療関係者だ。２００㌔、３００㌔離れた村からもやって来たという。
亀山さんたちが柔道整復師の説明をする。パソコンとスクリーンを駆使して。アマルサイハン教授とノムンダリーさんがモンゴル語で通訳する。

「柔道整復術は、日本の武道から始まった伝統的な治療方法です。柔道には相手を倒す殺法と、相手の怪我を治す活法があります。殺法と活法は表裏一体です。足が折れたり、腕が脱臼したときの治療方法をこれから教えます。器具は、モンゴルで手に入る包帯、針金、ビニール袋などを使って自分で作ります。みなさんは、体で覚えてください」

実習が始まった。根来さんが青いトレーナーを脱いで、下着だけになった。窓の外では、雪が降っている。寒い。わたしは、室内でも分厚い防寒具を着ている。根来さんも、寒いだろうに。根来さんが患者の役をして簡易ベッドに寝ころぶ。膝や肩の治療法の実習だ。本間先生らがまず、見本を示す。続いて受講生が実際に患部を触り、治療方法を学ぶ。

また、パソコンとスクリーンを使って、赤ん坊の股関節保護方法を指導した。モンゴルでは遊牧民の伝統で、赤ちゃんを棒状に、布できつく縛る習慣がある。赤ちゃんを移動させやすいからだ。しかし、この慣習によって、赤ちゃんが股関節を痛めることがある。

若い女医、ヤンジンさん（２４）は、３０㌔離れたタリアランという町からやってきた。乗り合いジープで１時間３０分かけて、講習会に駆けつけた。講習会は、病院長が教えてくれたそうだ。

「赤ん坊を簀巻きにして、きつく縛ると、股関節を痛めやすいことがよくわかりました。骨折や脱臼治療用の器具も、わたしたちの町で手に入るもので作れるのですね。講習会で習ったことは、すぐに活用できるものばかりです」と笑顔で話していた。

昼食は、町の最高級レストランへ出かけた。しかし、ここでもトイレの水が出ない。ま、いいか。紅茶、羊肉のスープに、インドのナンのような平べったいパン。続いて細切れ羊肉の煮込みとスマッシュポテト、ハム、それに米飯。香辛料の味付けがないので、若い美人の従業員にコショーを頼んだ。

彼女はコショーを大袋ごと持ってきた。１０人前で締めて３万５０００トグリク。１人分でざっと３５０円か。

ちなみに店内にはカラオケセットがあった。韓国製だった。

午後、オラーンゴムの町を歩いた。ひとりでは危ないというので、亀山さんが同行した。

音楽隊の生演奏の音が聞こえてきた。どこで演奏しているのだろうか。音を頼りに探す。モンゴル軍の基地があった。門越しに敷地内をのぞく。１０数人の若い軍楽隊が練習をしていた。バヤル首相が本日、オラーンゴムを視察するという。歓迎式典に備えて練習しているのだろう。

軍基地の向かいに市場があった。モンゴル語で「ザハ」という。市場の広場には、馬車や３輪自動車が群れている。簡素な食堂が軒を並べている。窓からのぞく。若いカップルや家族がうどんのような汁物を食べていた。市場では、穀物や、装飾品、民族衣装などを台にのせて売っている。骨付き丸ごと羊肉も。路上では、サイコロとばくもやっていた。わたしはずんずん、市場の奥へ踏み込んでいく。

「なんか、やばいっすよ。帰りましょうよ」
亀山さんが促す。わたしはもっと探訪したかったが、ぼちぼち、引き返すか。安全第１だ。
確か、空港に近い場所に、ラマ教寺院があったはずだ。中心地を抜け、空港に向かう。ラマ教寺院が建っていた。白い塀で囲んでいる。正門から内部に入った。参拝客は一人もいない。敷地内にゲル（移動式住居）がある。ラマ教僧の住居だろうか。しかし、人気はなかった。
午後の講習が終わった。車で、宿泊施設にもどった。制服警官が交通整理をしている。今夜、バヤル首相がわれわれと同じホテルに宿泊するのだ。宿泊施設内には、３人の私服警護員がいた。わたしたちに旅券の提示を求めた。首相はまだ、到着していないが、３階の特別室に泊まる予定だ。わたしたちの部屋の真上だ。さて、今夜はどうなることやら。
食堂には、テーブルがきれいに並べられている。白いテーブルクロスがかけられている。卓上には、地元産のウオツカ，果物など。医師のような白い上着を着た女性たちが忙しそうに立ち働いている。ウランバートルから来た首相専属の晩餐会スタッフという。
わたしたちは、食堂脇の小部屋に押し込まれた。豪華な前菜が卓上を飾っていた。ところが、わたしたちが小部屋に入ると、女性従業員があわてて前菜を台所へ片づけ始めるではないか。首相晩餐会用の前菜を誤って、わたしたちの食卓に出したらしい。
午後８時から、夕食が始まった。牛のミルク茶、キャベツ、ニンジン、トマト、キュウリのサラダ。羊肉の餃子。羊肉とジャガイモ、野菜のスープ。スープは洗面器で出てきた。メイン料理は今夜もマハ（骨付き羊肉の塩ゆで）だ。マハは、アルミ製ボールに入っている。おそらく、首相晩餐会のため、台所の食器が出払ってしまったのだろう。

例によって、わたしたちはウオツカを飲みながら、食事を楽しむ。午後９時３０分ごろ、女性従業員が「ぼちぼち、食事を終わってくれ」という。午後１０時から、首相晩餐会が始まるそうだ。
わたしたちはそそくさと退散した。２階のロビーには、馬頭琴の奏者や女性歌手らが待機していた。私服警護員や制服警官もたくさんいて、ものものしい雰囲気だ。警護員が「部屋から外に出るな」と警告する。自分の部屋に入った。ちょうど真上が首相の部屋だ。天井からコツコツと足音が響いてくる。おそらく、首相が歩いているのだ。
わたしたちの部屋に、みんな集まった。ウオツカをまた、飲む。
同室の鑪野先生は「先に休みます。失礼します」といって寝室にはいった。前日、団長ということで、昼間から、ウオツカで乾杯を重ねていた。また、モンゴルに来る途中、韓国・仁川空港で搭乗機を待っている間、風邪をひいたそうだ。体調を崩すと、明日の講義にさしつかえる。早めに寝るという。賢明である。自分を律している。

わたしが「土佐の十三拳」という飲み方を教えた。一人が１から３までの数字をいい、順番にまわる。１３番目にあたった者が、ウオツカを酒杯１杯、飲み干すのだ。ゲームが始まった。どういうわけか、根来さんによく当たる。最初は調子よく飲み干していたが、だんだん、ウオツカがこたえてきたようだ。根来さんが「どうもおかしい。逆回りしよう」と提案する。逆回りにした。やっぱり、根来さんによく当たる。一人が数字を３個までいう権利を持っているので、ある人を照準にして、お互いが調整しやすいのだ。

「だれが友達か、よくわかるでしょ」とわたしがいう。みんな大笑いだ。

夜も更けてきたが、ウオツカの宴は続く。そこへ、警護員が駆け込んでできた。モンゴル語でなにか怒鳴っている。アマルサイハン教授の顔色が変わった。

「たいへんです。みんな静かにしないと、逮捕するっていってます」

わたしたちは、首相の安眠を妨げる狼藉者なのか。逮捕されたら、たいへんだ。ウオツカの宴は即刻中止。そそくさとベッドにもぐりこんだ。

３月２４日（月）雪

きょうも雪が降っている。

朝食は牛タン、トマト、パン、バター、ブルーベリージャム、牛乳茶、そしておかゆだった。

午前９時から、講義が行われる。今日の会場は県庁の大会議室だ。この日、首相が講義を視察に来るかもしれないという。だから、会場を変更したのだろうか。だが、首相は現れなかった。会場を視察したのは、ツオルモン厚生副大臣だった。凛とした美人だ。年齢は３０代の後半か。知性的だ。民衆とは明らかに違う雰囲気を身辺に漂わせている。おそらく、彼女は、代を継いで上流階級に属しているのだろう。

厚生副大臣は「日本の伝統的治療法、柔道整復師の技術を、身を持って習得してください」と受講者たちに呼びかけていた。

この日の講義は、骨折や脱臼の治療で使う器具作りだ。ウランバートルで買ってきた針金、テープ、包帯、ビニール袋などを使う。日本でしか市販されていない材料を使って器具を使っても意味がない。日本から持ち込んだ材料の在庫がなくなれば、もう、おしまいだ。日本の援助はややもすれば、最新・最高級の医療設備を僻地に寄贈する例が多い。だが、日本の技師が帰国したあとも、その医療設備が機能していることはまれだ。一度、故障したら、修理できない。ある部品が消耗したら、交換する部

品の在庫がない。停電で、設備が動かないーなど。わずか半年後に、高価な医療設備がほこりをかぶっていることもある。柔道整復師会は、モンゴルで入手できる材料を駆使する。こうすれば、現地でも永続的な治療が可能となる。

モンゴル人は意外と器用だ。ペンチを使って、上手に器具を作り上げていく。和気藹々。作業を楽しんでいるようだ。

昼食は、前日と同じレストランで。教授が持ち込んだホブス湖で採れた大きな魚（鯉ほどの大きさ）の薫製、羊肉入りのモンゴル風うどん、羊肉入りオムレツ、米飯、スマッシュポテト。わたしは、原則的に出された料理は残さず食べる方だ。モンゴルでもきれいに食べてきた。しかし、一人前の量が多すぎる。さすがに胃袋がもたれてきた。魚は味見程度。うどんはきれいに食べた。これでおなかは一杯になった。次に出てきた料理はほとんど手をつけなかった。

午後の講義中、「治療してほしい」と母親が少年を連れてきた。股関節に障害があるらしい。患部のレントゲン写真を持参していたが、写真が不鮮明だ。本間先生と久米先生が写真を明るい窓や蛍光灯に近づけて見るが、患部がぼんやりしている。原因ははっきりとはわからない。

少年は１５歳だった。ズボンを脱いで、治療台に横たわる。久米先生が応急の治療を行った。しかし、限界があるようだった。

続いて、受講者である青年医師がやってきた。今朝、急にぎっくり腰になって、歩行もままならないという。こちらは、原因がはっきりしている。久米先生がただちに治療した。青年医師はすぐに歩けるようになった。彼は、日本の伝統的治療法に感心していた。

夕方、宿泊施設に帰った。この日、宿泊施設の隣に建つシャワーハウスが営業するという。シャワーハウスは、週に１、２回、営業しているようだ。さっそく、タオルと石鹸を持ってシャワーハウスへ出かけた。個室が６室、並んでいる。脱衣室で裸になる。脱衣室には一応、ドアがあるが、鍵はない。シャワーのレバーをひねった。熱い温水が出た。ありがたい。髪を洗っていると、ドアをだれかが「どんどん」とたたき、勝手にドアを開けた。わたしは裸のまま、振り向いた。モンゴル人のおじさんだ。当方がシャワーを使用中とわかったのか、なにもいわずにドアを閉めて去っていった。

なにはともあれ、熱いシャワーを浴びてさっぱりした。部屋にもどる。今夜は、地元の医師がわたしたちを招待してくれるという。アマルサイハン教授の案内で車に乗って出かけた。その病院は町の中心部にあった。２階建て。ジャルガラン病院という。ジャルガランとはモンゴル語で「幸福」を意味する。経営者は、アルタンフー医師（４８）と妻のウネルジャルガル医師（４７）だ。アルタンフー医師は、りっぱなヒゲを蓄えた紳士で、夏目漱石にそっくりだ。二人は地元出身。ウランバートルの国立大学医学部を卒業後、地元の国立病院の勤務医を続けていた。４年前に独立し、病院を建てた。医師３人、看護士９人、ベッド１６床。産婦人科、外科、内科の病院だ。病院内はとても清潔だった。医薬品も他品目がそろっている。入院患者用の病室もきれいだ。水洗トイレも完備している。

亀山先生が「次回、オラーンゴムに来るときは、ここに泊めてもらおう」という。まんざら、冗談とも思えなかった。

夫妻の長女は、現在、ウランバートルで仕事をしている。２女は、ウランバートルの国立健康科学大学医学部４年生。

「彼女は、わたしの同級生だよ。よく知ってます。びっくりした」とノムンダリーさんが驚いていた。人の縁とは不思議なものだ。

病院を見学したあと、歩いて、町のレストランに向かった。わたしたちは個室に案内された。全員着席したところで、アルタンフー医師が立ち上がってあいさつした。

「みなさん方の講義を、受講生たちが楽しそうに聞いています。しかも、今日は厚生副大臣も来てくれました。みなさんが教えてくれることは、本当に効果的です。毎年、来てください」

ウオツカを杯になみなみと満たす。

「トクトイ（飲みましょう）」

アルタンフー医師は一気にあおった。この宴席には、どういうわけか、杯がひとつしかない。

根来さんがゴビ地方を訪れたさい、地元の長老からもらった由緒あるモンゴルの杯だ。

杯が、隣のウネルジャルガル医師に渡される。夫人もあいさつして「トクトイ」。杯が順番に

まわっていく。そこへ、料理が運ばれてきた。まず、羊肉、ジャガイモ、ニンジンのトマト味スープ。リンゴ、ミカン、トマトの盛り合わせ。そして、メイン料理のマハ（骨付き羊肉の塩ゆで）が大皿にのって、どーんと出てきた。ナイフで肉を削る。肉をナイフの背にのせて、そのまま、食らう。

うまい。うーん。このへんで、ウオツカを飲みたいのだが、まだ、杯がまわってこない。なにしろ総勢１２人もいるので、「トクトイ」の順番が来ないのだ。やっと、わたしの番になった。手短にあいさつして「トクトイ」。ウオツカがしみわたる。

深夜、食泊施設に帰った。ようやく、雪がやんだ。星が見える。だが、町中は、石炭暖房による煤煙のせいで、期待したほどではない。わたしは、モンゴルの満天の星を見たい。郊外に向けて歩く。亀山先生も同行した。モンゴルでは、犬を放し飼いにしているので危険という。なかには、狂犬病の犬もいるのだ。ゲルが立ち並ぶ夜の町を歩く。途中、闇のなか、白馬にまたがった男がぬうっと現れ、驚いた。２０分ほど歩き、ようやく、ゲルの集落を抜けた。はるか地平線の彼方がほんのり明るい。あのへんにも町が在るのだろうか。天をあおぐ。星は多い。が、昨年夏、与那国島で見た満天の星のほうが感動的だった。モンゴルも大草原の夜空を見るしかないのだろうか。

「ぼちぼち帰りましょうよ」

亀山先生に促され、帰路についた。途中、路上で二人の男がうずくまっていた。一人の男が号泣している。もうひとりがなぐさめている様子だ。なにがあったのだろうか。

３月２５日（火）雪

今朝もまた、雪が降っている。きょうの雪はパウダーのように軽く、きれいな雪だ。きらきらしている。気温マイナス２０度。毎日、雪が降っている。晴れは、初日だけだった。初日に写真を撮影しておいてよかった。

朝食は、パン、チーズ、目玉焼き。モンゴルの卵は、日本の卵と比べて黄身の色が薄いようだ。そして、例によっておかゆ。

講義は最終日となった。腕の骨折・脱臼の治療実習だ。本間先生が手本を示す。患者役は、根来先生だ。根来先生はまた、上半身、裸になる。会場は寒い。わたしは、分厚い防寒具を着ているのに。続いてモンゴルの医師たちが実習する。

本間先生が「脱臼した患者が１００人いたとする。９９人を治しても、１人でも失敗したらプロとはいえない」と訓示した。モンゴルの医師たちは真剣な眼をしてうなずいていた。

続いて前日の講習の復習。「自信のある人は手をあげてください」。モンゴルの医師たちが次々に手を挙げて、挑戦する。なかなかに意欲的だ。

昼休みの前にハプニングが起きた。久米先生がこの日、誕生日を迎えた。久米先生は開講初日のあいさつで「３月２５日はわたしの誕生日です。講義を成功させて、いい誕生日を迎えたい」とあいさ

つしていた。受講生たちはこのあいさつを覚えていたのだ。
　壇上にテーブルを置き、デコレーションケーキや、果物、飲み物を並べる。久米先生を壇上の椅子に座らせた。受講生たちは久米先生を囲み、合唱した。オラーンゴム賛歌だ。久米先生の目がうるむ。わたしは感動して、涙を流した。モンゴル人って、いいやつだなあ。
　久米先生は「泣きそうになりました。オラーンゴムに来てよかった」

　昼食は、国立病院の院長室に招待された。羊肉のミンチ、ジャガイモ入りのうどん。熱々のうどん一杯で満腹になった。そこへまた、マハが大皿にのって出てきた。さすがに手が出ない。味見だけして遠慮した。しかも、このころになると、羊肉の独特の匂いが鼻につくようになった。わたしは外国に旅したら、現地の料理を食べる主義だ。しかし、こう毎日、毎食、羊肉が出てくると、ちょっと・・・。
　マーム一院長は「どうして食べないのか」とマハを勧めるが、もう、食べる余裕がなかった。
　午後の講習が終わった。全員で記念写真を撮った。最後に受講生全員が日本語で感謝の言葉を述べた。「アリガトウゴザイマシタ」。拍手に送られてわたしたちは会場を去った。

　宿泊施設にもどった。アマルサイハン教授が「今夜は、わたしの友人のゲルで食事をしましょう」といった。ゲルで食事か。いいぞ。いいぞ。モンゴルに来たからには、一度は体験してみたい。
　わたしたちは、町の中のゲル集落を訪れた。めざすは、医師、オトゴンバヤルさん（４０）のゲル

だ。木の塀で囲った敷地のなかにゲルが建っていた。入り口から中に入る。想像以上に広々としている。一番眼につくのが大型テレビだ。日本製（ビクター）で、我が家のテレビより、画面が大きい。
「アイロンを買って、くじ引きで当たったんです」
画像は鮮明だ。ニュース番組で、女性キャスターが登場している。有線放送だという。
モンゴルの遊牧民たちは、最近、大草原のゲルでも、テレビを見ているそうだ。電源は太陽電池。パラポラアンテナで受信している。
ゲルの奥にソファーとテーブル、椅子が並んでいる。すでにテーブルの上には、骨付き羊肉の丸焼き、白身魚のフライ、ジャガイモとニンジンの炊き合わせ、白米、そしてチャツァルガナのジューズが並んでいる。チャツァルガナは、モンゴル産の木の実だ。滋養強壮に効くといわれる。チンギスハーンの軍隊は、世界征服を企てた。一説によると、兵士が過酷な強行軍に耐えられたのも、チャツァルガナの果実を食べていたからという。
モンゴルでは、息子が結婚するとき、両親がゲルをプレゼントする習慣がある。ゲル一式で５０万トゥグリク。ざっと５万円だ。室内では石油ストーブを焚いている。暖かい。オトゴンバヤルさんは半袖のＴシャツ一枚で、にこにこしている。外気はマイナス１０数度というのに。冬は、アパートよりゲルのほうが過ごしやすいそうだ。水は、給水地からバケツで運び、敷地内のタンクに貯める。電気は電線から引いている。
オトゴンバヤルさん一家は、夫婦と２男２女。末っ子はまだ、２歳だ。中学生の長男と小学生の長女は自分の携帯電話を持っている。わたしたちがゲルに滞在中、長男の携帯電話が鳴った。友人からの電話らしい。長男は父親にひとこと告げて、外へ出ていった。モンゴルの辺境にも文明社会が押し寄せているようだ。
一家は、冬、町中のゲルで暮らす。厳しい冬を乗り切るため、大量に家畜を食べる。
「ひと冬に、牛２頭、羊４頭を食べます」
５月になると、一家は郊外の泉のそばに引っ越すという。夏と冬、快適にすごすため、住み分けているのだ。
さあ、食事が始まった。ウオツカで、乾杯。わたしは、羊肉に手をつけなかった。さすがに羊肉はもうたくさんという感じだ。しかし、亀山さんは「おいしい。おいしい」といって、大きな羊肉の塊をつかみ、ナイフで削っては、むしゃむしゃ食べている。胃袋も相当にタフである。
ウオツカにほどよく酔って、オトゴンバヤルさんが立ち上がって歌った。
オラーンゴム賛歌だ。分厚い胸と胴体が、弦楽器の胴のような機能を果たしているのだろう。よく通る、すばらしい声だ。
続いてアマルサイハン教授が歌う。故郷、ゴビの望郷の歌だった。

ふるさとから持ってきたこの石よ
触ると　しっとり濡れている
ふるさとが　わたしのことを想って　泣いているのだろうか

お返しに、五反田先生と根来先生がモンゴルの歌「草原の大地に柔らかい世界を」を歌った。これもまた、なかなかに聴かせた。
食事の最後に、久米先生が受講生からもらったケーキをナイフで切った。オトゴンバヤルさんのこどもたちも、喜んでケーキをほおばっていた。
さて、室内の一角に気になる毛皮が飾っていた。
「オオカミです。わたしが撃った狼です」
オトゴンバヤルさんは、胸を張った。
１９９９年、父親が胃病で倒れた。狼の生き血が病に効くという。オトゴンバヤルさんは友人と共に、オブス湖のほとりの山に登った。そして見事、仕留めたのだ。

さて、アマルサイハン教授は、狼狩りの達人である。

今年２月、ウランバートルから北西１８０㌔のオンドルシレトに向かった。友人と計５人のチームだ。夜、４輪駆動車で出発。午前２時に到着した。現地は、山が連なり、麓には大草原が広がる。狼の通り道を見下ろす地点で待ち構える。狼は、夜、山を降りて、羊など家畜を襲う。食欲を満たしたあと、夜明け前、山に戻る習性がある。

「夜明け前が勝負です」

狼狩りは、空振りが多い。一晩、待機しても、狼の群と遭遇しないことが多いのだ。

今回は、成功した。見事１頭を仕留めた。

素朴な質問をした。狼の肉はおいしいのだろうか。

「すごく臭くて、固い。おいしくないよ」

しかし、狼の肉を食べると、体が熱くなる。走りたくなるほど、元気になる。滋養強壮や病気の薬として食する。肺結核の患者は狼の肉を小麦粉の皮に包み、餃子のようにして食べる。狼の心臓は、心臓病患者に効くという。脳味噌は、水で溶いて、そのまま飲む。睾丸は精力剤だ。

「危険です。精力が異常に高まります」

毛皮はコートの素材になる。１着３０万ＴＧ程度だ。ざっと３万円。ウランバートルでは、毛皮をなめして外国人向けにおみやげとしても売っている。こちらは１頭１８０ドルだった。

アマルサイハン教授はこれまでに９３頭を仕留めたという。１９９６年には１年間で３３頭を撃ったそうだ。彼は狼の生態にくわしい。狼の群、例えば１０頭いたとする。そのうち９頭が眠り、１頭が起きて周辺を警戒している。また、眠る時も熟睡はしない。寝て、しばらくすると、頭を起こして起きる。そしてまた、眠る。一時も油断しない。

ある年、異常な体験をした。狼狩りに出かけ、絶好の地点で待ち構えていた。そこへ、メス１頭、オス１０頭の群がやってきた。チャンスだ。アマルサイハン教授は、先頭のメスを撃った。命中した。メスが倒れた。すると、オスたちはどういうわけか、メスに襲いかかった。オスの群がメスの肉や内臓をむさぼり食らうのだ。教授は銃をばんばん撃ち、数頭のオスも仕留めた。この日はかつてない大猟だったという。

狼狩りは、もっとも危険な狩猟だ。３年前、狩猟を経験したことのない素人が接待で、狼狩りに参加した。銃弾が命中し、狼が倒れた。彼は有頂天になって、仕留めた獲物に無造作に近寄った。ところが、狼は絶命していなかった。最後の力をふりしぼって、ハンターの喉笛に喰らいついた。素人の彼は出血多量で死亡したという。接待で狼狩りを楽しむはずだったのに・・・。

「銃弾が当たっても、安易に近づくのは危険です。眼を閉じて、じっと動かない狼は特にあぶない。死んだふりをして、最後の反撃をねらっている。絶命した狼は眼を開け、しっぽがひくひくと痙攣しています」

狼狩りには、一度、参加してみたい。

実は、オラーンゴムでも、わたしたちのために狼狩りが計画されたのだが、降雪が激しく、中止となった。中止と聞いて残念に思ったが、冷静に考えれば、幸運だったのかもしれない。

３月２６日（水）晴れ

オラーンゴム最後の朝だ。きょう、飛行機でウランバートルに帰る。
朝食は、ハム、パン、ブルーベリーのホットジューズ、そしておかゆ。
朝食の席に、マームー国立病院院長と保健所長ら３人がやってきた。わたしたち全員に地元のウオツカと岩塩を渡した。世話になったお礼という。さっそく、ウオツカを１本開封し、ウランバートルへの旅の安全を祈願して「トクトイ」。わたしは、太陽の出ている間は、酒を飲まない主義だが、モンゴルの風習に従って一杯だけ、飲んだ。
さあ、空港へ向け、出発だ。わたしは、すでに荷物をトランクに詰めていたが、鑪野先生は、２階の部屋にもどり、ゆっくり、パッキングしている。土産も多く、意外と時間がかかる。わたしは同室なので、いっしょにいて見守っていた。鑪野先生、ようやく、パッキング完了。トランクを抱え、駐車場に降りた。あれ、だれもいない。車もないぞ。どうやら、わたしたちは取り残されたようだ。一行は２台の車で分乗して出発したので、人数確認ができなかったようだ。さて、どうしようか。通常の旅先なら、タクシーを呼んで、空港に向かう。だが、モンゴルの辺境には、タクシーはない。
鑪野先生の携帯電話から、亀山先生の携帯に電話した。呼び出し音が鳴っている。通じた。
「えっ、まだ、ホテルにいるんですか。すぐ、車をまわします」
やがて、亀山先生が手配した車がやって来た。わたしたちは車に乗り込み、無事、空港で合流することができた。
空港の待合室で、しばらく、待機することになった。そこへ、オラーンゴムの医師たちが続々と見送りにやってくる。みんな、ウオツカをぶらさげている。
「遠い日本に帰るのか。さあ、別れにわたしの酒を飲み干してくれ」
一杯だけならいい。だが、何人もが、ウオツカを勧めるのだ。しかも、朝。つまみもない。ウオツカのストレートを一気飲みだ。これはこたえる。だが、わたしたちは飲んだ。モンゴルの熱い人情を次々に飲み干していった。
「今度は、夏に来ておくれ。緑のハルヒラー山、光り輝くウブス湖、それはきれいだから」
搭乗手続きが始まった。われわれは、白いプロペラ機に乗り込んだ。
午前１１時１５分、わたしたちを乗せた飛行機は、離陸した。
眼下に大雪原が広がる。
この大雪原も夏には、青々とした大草原になるのだろう。
さらば。モンゴルの辺境よ。
草原の大地に柔らかい世界を。